

東欧でたところ紀行



荒谷 卓

(市ヶ谷・会員)

一 はじめに

五月一日から十二日の間、東ドイツ、チェコとスロバキア、ハンガリー国内を初めて旅する機会を得た。

昨年末からの東欧に関するニュースに接するにつれ是非東欧の国々を直に見聞したいものだと思っていたところ、約二週間の休暇が付与され、まさに絶好の機会だと、早々旅行を計画した。

五月一日アエロフロートを利用してモスクワ経由で東ベルリンに到着した。二日東ベルリン内を、三日は西ベルリン内を探訪、四日鉄道でプラハへ移動し途中ドレスデンにて約半日市内を徘徊した。五、六日はプラハの町を隅々まで巡回、七日鉄道でブラティスラバへ移動、翌日(八日)昼まで同市内巡回、午後さらに鉄道にてブダペストへ移動。九、十日ブダペスト内を巡回し、十一日往路と同様アエロフロートを利用してモスクワ経由

で成田へ戻った。

この旅行は、畏友井上一尉と二人、行く先々の宿も準備しないままの自由紀行で、毎日行軍なみに歩き回り(一日十キロ以上は歩いたろう)行く先々の町や人等を目に焼き付けてきた。この間僅か十二日、見聞できる場所も限られ「東欧紀行」などと題するのはおこがましいが、「百聞は一見にしかず」、見る前と見た後ではこれらの国々に対する見方が、さらには我が国に対する見方が大きく変化したことから、ここにその所感を記してみる。

二 アエロフロートに見るペレストロイカ

(一) 機内の様子

「これか?!」畏友井上の声。なんのことかと見てみれば、我々が乗り組むであろう「アエロフロート東京—モスクワ便」の勇姿であった。「IL(イリュージン) 62」という機種の種類は、ジ

ャンボ機をイメージしていた我々には、確かに身振りさせるものがあつた。航続距離約一万キロ、巡航速度八三〇ノ時のこの機は、四発のエンジンが主翼の後方(尾翼の下)の胴体に独立して付いており(英一九六二、VCタイプ)予想外に小さい。

さて、機に搭乗する。座席は六列、背もたれに手を架けると何の抵抗もなく前に倒れてしまう。背もたれの頭の部分には白い布が掛けてあつたがこれがまた面白い。白いさらしを適当な形に切つて(菱形であったり、台形であったりその形は不定)、その淵は縫い止めることもなく、つぎつぎに糸がほつれている。正に期待どおりである。機内のサービスがまたじつに厳しい。たまたま、日本人の乗客が洗面所に立っている間に機内食が配食され始めた。その乗客が洗面所から帰ってきたときには、スチュワーデスさんが引っぱっているワゴンがちょうど彼女の座席を通り過ぎていた。彼女(洗面所に立っていた乗客)が配食中のスチ

ュワーデスに「座席に帰りたいから(通路を)通してくれ」と言うと、あっさり断られた。彼女は、スチュワーデスが配食を完全に終了してから、ようやく座席に着くことができた。この仕事に対する誇りと厳しさは見事である。

何処かへ飛んで行き、噴水のようにシャンペンが飛び出てきた。周りの乗客には雨のようにふりかけたシャンペンをかきさす身をもつて受け止めたのはいいが、旅行の初日からスーツがおじやんになった。

モスクワ、東ベルリン及びブダペスト、ベルリン間のアエロフロート機に至っては、座席は早い者順で、スチュワーデスが顔を見せるのは機内食の配食時だけであつた。

ところが帰路モスクワ、成田間の便(九〇%以上日本人客で満席)では、何とスチュワーデス達の愛敬のいいこ

が、手順どおりシャンペンのコルクを止めているワイヤを静かに弛めた途端、「パン」とコルクは



我々が搭乗したIL-62(モスクワ空港)

と。頻繁に客席に顔を出し、乗客の注文に気持ち良く答える。あげくの果てにはペレストロイカウ

オッチとか、ゴルビーTシャツ等を売り回っていた。

(二) 考えたこと

従来のアエロフロートのサービスというのは、おそらくモスクワへの往路とモスクワ〜ベルリン(ブダペスト)間の様なものだったろう。そして、モスクワからの帰路で見たサービスの变化というのは、当然ベレストロイカのためのものである。そこで、このベレストロイカの社会構造への波及は早いのか遅いのか(その効果は別)と考えてみた。一九一七年来約七十年間続いた(強力な)社会構造を大転換すること、そしてその社会(ソ連)というのはとてつもなく大きいことを考えたとき、とても日本のタイムスケールの常識では推し量れない。かつて、勝海舟が「せっかちな日本人には、シナやロシアを理解できまいよ」と言ったことを思い起こす。四〇五年で機内サービスまで変化が及んでいるという事実は、注目すべ

きだと思ふ。ゴルバチョフは、(東欧などを切り捨て)ソ連邦という既存の形態を維持して改革しようとしているが、(民族問題等がいよいよ難しくなり)仮令それがだめでも、ちゃんとエリツィン等がさらにスマートなロシア(共和国)という単位の改革を準備しているではないか。(これは例えば、ソ連の核がロシア共和国内に移動配置されれば、その肯定兆候と見れるであろう)このあたり近代の日本等と比べると、ロシアは何と言っても遠大な展望を持っているように思う。

三 情勢のパワー

(一) ドイツ統一は既成事実が先行

ブランデンブルグ門の両側(ドイツ人のみ通行可能)そしてチェックポイント・チャーリー等の東西ベルリン間の検問所及び西ベルリンとポツダム間の検問所等は、ほとんど緊張感はないものの、手続きには厳しいものがあつた。ところが、

スタインステイケン(Steinstücken)という西ベルリンの東西部(ブランデンブルグ門から約二十キロ)に行ってみると、

そこでは「壁」がいたるところ解体され、西から東へ入ろうが、東から西へ入ろうが誰も検問しない。それどころか、我々が其処を(東西に)行ったり来たりしている際に東ドイツ兵が何度も通り過ぎたが何も言わない。つまり、実質「壁(東西ベルリンの境界)」はほとんど機能していないのである。



今はなきチェックポイント・チャーリー

我々が旅行していたときは、ちょうど東西の通貨統合案がTVで報道されていた(東ベルリンの

ホテルのTVで見た)。この様な統合案は、当地(ドイツ)の経済学者でさえ極めて非論理的で、経済的常識を逸しているとの見方だったようである(おそらく日本では目茶苦茶な批判を浴びるのではないかと密かに考えた)。現に、東西の経済力、産業規模の違いを現地で見れば、これがどうやって一緒になるのだろうかと考えずにはいられない。町を走るベンツと外資のボートの余りのアンバランスに啞然とする。しかし、現にもう境界がないのだ。経済統合と言うが、実情は社会の動きが国家としての統合に大きく踏み出しているのである。これを止める力は存

(二) 考えたこと

在しない。世の中が大きく動きだしたときの情勢のパワーの前には、経済理論など影も形もなくなってしまうという一つの例であろう。このあたりは、日本も余程注意しなくてはいけないところだ。

四 歴史のとらえ方

(一) 歴史博物館Ⅱ民族史博物館(東ドイツ)

ブランデンブルグ門から、東ベルリン市街の中央通ウンター・デンリンデン(Unter Den Linden)を約一時間程東に歩くとフンボルト大学の隣に「ドイツ歴史博物館」がある。十分なひろさの館内には、「ドイツ人」の歴史が展開されていた。原始時代から民族大移動、神聖ローマ帝国、ドイツ帝国そして第三帝国を経て現代(ちょうど「統一ドイツ」への歴史を刻むべく、コール、ホーネッカーの抱き合っている写真を掲示して着々と準備を進めていた。)へと続いていった。途中「ドイツのコミュニストの歴史」や「ソ連による

解放」の部分がかなりスペースを取っていたものの、「ドイツ人」の歴史は、脈々と継続しており、例えばナチズムはその倫理的過ちは認めつつも、事実を客観的に捉えているに留まり、歴史の評価はくだしていない。この様に約四十年間のソ連の支配下にあってもドイツ人として誇りを持ち続けている。

(二) 静かで力強い民族ナショナリズム(チェコとスロバキア)

プラハは、チェコ人のナショナリズムの起源とも言える「ヤン・フスの像」が旧市街広場の中央に立っている。プラハの中央通りの突き当たりにある「国立博物館」の中にはチェコ人の民族史が展開されている。ここを訪れたとき、丁度「民族の父」バラッキーの特別展示会がもようされていた。

スロバキア共和国の首都ブラチスラバ。この中心たるブラチスラバ城の中に展開されているのも

またスロバキア人の民族史である。

(三) 強烈な民族ナショナリズム(ハンガリー)

ブダペストは、特に凄い。「ブダペスト」は山の手の「ブダ」と下町の「ペスト」(間にドナウ川が南北に流れる)からなっている。ペストの市民公園の入り口「英雄広場」には、圧倒するような像が数多く立ち並ぶ。中央にある騎馬像六体がマジヤール族の首長だったアルパードと六人の部族長、その周りに民族の英雄達が半円形に立ち並んでいる。ブダの王宮には「我が首都の千年」「ハンガリー・ルネッサンス」の展示に象徴される強烈な民族史博物館がある。

(四) 考えたこと

このように中央及び東欧の国々の歴史の基軸は、「民族史」である。歴史のとらえ方は、何を指標にしてみるかが大切であり、これらの国々では、西欧ナショナリズムの波及以降「民族」に国

やめても 修親
はなさないで!!

定年退官予定者の

修親購読の申し込みについて

日頃、会員の皆様には修親に対してご高配を賜り厚くお礼申し上げます。

現在、定年退官者に対する修親購読につきましては、退官二カ月後に当月号を添えて購読のご案内を申し上げますが、最近特に、購読の手続きの問い合わせや退官直後も途切れなく購読したいとの要望も数多く寄せられております。

つきましては今後、退官者に対する現行の購読のご案内の他に、退官される前に購読申し込みが終わるよう、各修親会においてご尽力下さるようお願いいたします。(既配布の振替用紙をご使用下さい)ご退官後も引き続き、修親がより一層皆様方の交流を深める一助ともなればと念じております。

(刊行委員会)

家の正当性を求め、常にこれを意識してきている（ナショナリズムの波及とその本来的性質の変化の縮図は東欧ナショナリズムの形成過程に象徴的に表れている）。従って、彼らは彼らの歴史を民族史としてとらえていることを正しく理解しなくてはならない。

これは、我が国の歴史を考える際にも極めて重要な意味を与えてくれる。我が国の歴史教科書では、日本史を文学史、工芸美術史、そして大陸との交流史を主軸にとらえている。そして日本の「政（社会の統治様式）」を西欧と同質の「政治史」としてとらえられている。ここに大きな誤りがある。日本の場合、近代西欧政治思想が持ち込まれたのは、わずか百年前であり、それ以前の二千有余年は、明らかに民族史である。また、明治以降でさえ日本人（一般市民）は、西欧ナショナリズムというものを殆ど理解していない有り様では、とても西欧的政治史を日本史の基軸に据えるわけにはいかないはずである。もちろん戦前の

（教育上の）歴史観にも無理がある。歴史を教育するということは、いわば価値観を強要するという面があり（史学研究とは別）、よくよく考えねばならないところである。

五 東西の対立に「正当性」は存在せず

（一）生活の実情

東ドイツには、確かに物（食糧、飲料等）が少ない。マーケット等はドレスデンでようやく見つけた。とは言っても、町の人々は、別に困った様子は伺えない。日本のように、物がごった返している環境を基準にすれば、「何と不便な社会」と感じるだろうが、もともと無ければそんなことは考えまい（食うに困れば話は別だが）。むしろ、彼らの自信に満ちた態度を見れば、日本人が物（金）に心が支配され、人間が貧困になっているようにさえ感じる。

（二）高いモラル

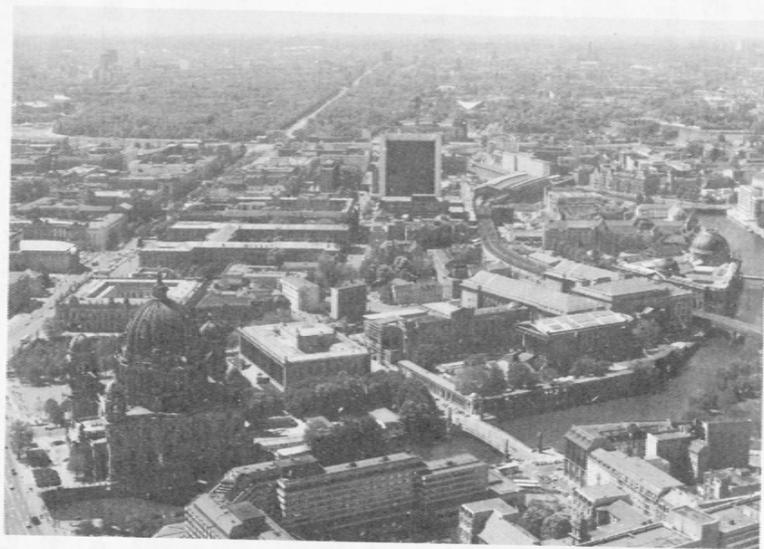
ドイツ、チェコそしてハンガリーと鉄道で移動し、市内の移動にもしばしば地下鉄を利用した。そこで非常に感心したことがある。地下鉄にお年寄りが乗り込んでくると、若い者（相対的に）は、確実に全員席を譲る。旅行者らしい若者が、これに気づかず席についていると、すかさず周りの人が注意をする。この様な例は、多くの場所で見かけた。すばらしいモラルである。「平等」という意識が原因かどうかは断定しかねるが、

「自由」を唱える先進国では、なかなか見かけられない光景であった。

（三）日本での

イメージとの違い

日本ではどうも「東ドイツは共産圏の優等生」というイメージからか、生活のレベルも当然東ドイツが一番いいだろうと考えがちであろう（少なくとも私はそうだった）。ところが、予想に反してチェコやハンガリーの方が（物質面での）生活環境は、はるかに豊かである。前に東ベルリンでは遂にマーケットらしきものに行き当たらなかったと言ったが、チェコやハンガリーでは、町の至る所で果物や



西ベルリンの眺め（東ベルリントワーより）

ホットドッグが手に入る。また、ウインドウに飾られた品物もなかなかしゃれたものが多い。レストランの食事などもその素材を見れば、東ドイツはかなり落ちる。ハンガリーやチェコがいちはやく西側に接近したことに原因があるのかは判断し兼ねるが、それにしては、ただか半年や一年でこんなに差がつくのだろうか。

(四) 考えたこと

日本での、ソ連東欧に対する一部(大部分か?)の見方は、明らかに一元的(物が多くあるかないかという)価値基準からの中傷的見方のように思える。それらの表現は、客観的ではなく誹謗に満ちているようにさえ感ずることもある。我々が接するソ連東欧に関する情報は、従来の量的乏しさとともに、質的面でも怪しいものが多い。冷静に観察すれば「経済システムとして市場経済が計画経済に対してその普遍的正当性ゆえ勝利した」と言うことさえ断定しがたい。何故な

ら、ナチスの統制経済が成功した例を見ても分かれるとおり、その成否は時々の環境(情勢)に左右されるのであり、ある一つの成功(あるいは勝利?)をもって、その経済理論の普遍的優越は確定できない。ソ連の経済の崩壊も、軍事費への過剰負担という一つの要素がないことだけで、結果は大きく変わったかもしれない。それに現在、市場経済自体現に問題を露呈しており、これによって引き起こされる社会問題は、危機的状況を生みかねない。

つまり、東西両社会とも夫々欠点を持ち合わせていたのであり、(約五十年間争っても)どちらも普遍的正当性を実証することはできなかったとは言えないだろうか。

六 文化の異質性

(一) 町と教会

行く先々にロマネスク、ゴシック、ルネッサンス、バロックなどの様式の見事な建物が立ち並

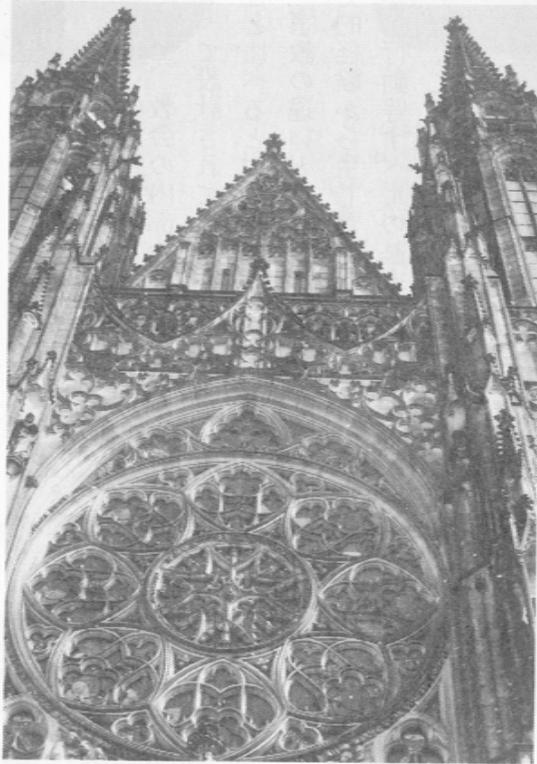
ぶ。ザクセン大国の首都ドレスデンは今もなお戦禍の傷跡を残しながらも、エルベ川の南の地域に昔ながらの様式を保持している。前の大戦ではほとんど戦禍を受けなかった「百塔の都プラハ」市街は、町全体が

年を費やして建てられたカソリック教会)だった。教会内全体に広がる巨大な宗教画と彫刻、教会の奥の華やかな祭壇とさらにその上位に位置する国王の席。これらの目的をもって人工的に構成

された巨大な空間による権威の象徴たる教会のパワーは、とても日本の教会では感じ得ないものである。

(二) 考えたこと

日本の神社が、そのたがまが解放的でない



聖ビート教会正面

中世の遺産である。そして、これらの町の中心をなす建物は教会である。私は、幼稚園がセント・パウロ教会であったため教会というものには特に違和感がないと書いていたのだが、明らかに特別な印象を受けた。特に圧巻だったのがプラハ城内にある聖ビート教会(カレル四世以来約六百

参拝者に対し受容的であるのに比べ、キリスト教会の外観は厳めしく魔獣が飛び交っており(彫刻のこと)、その中にはいるのにまず威圧を覚える。

圧倒的巨大な閉鎖空間とおびただしい装飾は、異教徒たる私を包み込み、完全に異質の世界へと迷い込んだような印象を受けた。日本の神社が、森の中でその自然に溶け込むようなたずまいを見せるのに比べ、明らかに自然とは非協調的にかも権威的力を発散しつつ存在する教会には異質のものを感じた。そして、教会の内部の造りは、布教という狙いをもって設計されており、これもまた布教しない神社と比べると対照的である。この様な異質性には、宗教の違いというだけの問題以上のことで、歴史的経験から生じた文化の違い（それはつまり考え方、行動等すべての基本的次元の問題）として捉えなくてはならないのだろう。

七 おわりに

今回の旅行では、「無構」(不完全な既存の知識に捕われないこと)をもってモノを見ることに徹した。あらゆるモノは、明確に正邪善悪に区別できるものではない。いろいろな社会の構造や人々

が持つ信条には常に利点欠点が存在していることが改めて実感できた。

理論というものは役に立つこともあるが、これを絶対視しては、この様な利点欠点が見えなくなる。東欧の激動を我々は決して勝利者あるいは無縁者として傍観しては行かない。現在の我々の社会思想、経済理論等も決して絶対ではないはずである。東欧の歴史的環境は、ドイツ、ロシアという大国の間にあり、西欧から伝播してきたナシヨナリズムを变质させたこと等、ある意味で日本の環境に類似している点もある。同時に、キリスト教を文化の基幹としているあたりは、当然我々とは異なる点である。この様に複雑な諸要素の中で生じた事象は、我々の浅はかな知識では、決して断定できない。ただ、今回の旅行は、自らの心の持ち方、モノの見方等といった点で、極めて多くのヒントを与えてくれた。最後に貴重な機会を与えていただき心から謝意を述べたい。

(陸幹校・一尉)